

2009年の半ばに

09.06.30 守山裕次郎

一時はどうなることかと心配された「新型インフルエンザ」も、世界保健機構（WHO）による警戒レベルは最も高い「フェーズ6」にまで引き上げられたものの、弱毒性だったという幸運にも恵まれ、日本では1名の死者も出さずに、最近ではほとんどニュースにも載らなくなったことは、実に不幸中の幸いであった。

メキシコで発生した新たな型のインフルエンザが、当初は死者まで出しながら、徐々に欧米に拡大していく中で、関西の高校生の感染が判明した頃は、この先国内でどのような影響が出るのか、大いに心配されたものであった。もしもこれが強毒性であったならと考えると、今更ながらぞっとする思いがするが、今回の貴重な経験を生かし、将来発生するであろう「強毒性タイプ」に備えて、適切な対応手順を行政も民間も今から真剣に考えておくことができれば、「災い転じて福となす」絶好の事例となることであろう。

ところで政治の世界は相変わらず国民不在のまま、もはや末期的症状と言わざるを得ない所にまで来てしまったようである。結局この1年近く、麻生総理は衆議院の解散時期を今か、今かと見計らっているうちに、そのタイミングを失ってしまったという感じがする。敵失（小沢前代表の秘書逮捕）により、一時的に若干支持率の回復傾向がみられたものの、先般の「鳩（弟）の乱」で再び20%前後の支持率となり、残りの任期がわずか3ヶ月ほどになってもまだ「このままでは選挙が戦えない」という理由で、古賀選対委員長が宮崎県の東国原知事に出馬を要請し、知事から「総裁選の候補にしてもらえるのなら・・・」などという「勘違い発言」までされるようでは、自民党ももはや「ジ・エンド」であろう。

それにしても麻生総理はすべてにおいて、リーダーシップも決断力も全くない人間であることが露呈してしまったが、無責任にも自ら職責を放棄したその前の総理も含めて、1億2千万人の命と財産を預かっているという責任感や使命感など、さらさら感じられない点は何よりも寂しい。これも、真の意味での修羅場など、全く経験したことのない2世、3世の「世襲議員」の弊害だと考えるのも、あながち的外れではないのであろう。

一方の民主党であるが、これまた責任政党としてどこまでやれるのかは、大いに疑問である。例えば今回問題になった小沢前代表の、西松建設との不適切と思われる関係・疑惑について、その説明責任云々という視点からは、彼の代表辞任前後で何ら進展がみられていない。田中角栄的な金権政治を打破するという政党が、自らの代表に疑惑がかけられているのなら、率先垂範してその疑惑に答えるよう、全党員が代表に意見具申するべきである。大半の議員が心に思っていることを、フランクに議論できないような体質の中で、一体何を変えることができるのであろうか？

民主党の今回の代表交代で、森元総理がいみじくも言った次の言葉は、けだし名言であった。すなわち「小沢という表札では、近所のガキ大将共に石を投げられて困るので、表札を鳩山に変えた。ただし家の中では相変わらず小沢氏本人が、金庫番を含めた一切の

実権を握っているという実態に変わりはない。」という趣旨の発言であった。代表を辞任して副代表になれば、疑惑に関する説明責任はなくなるということなのであろうか？日本のマスコミがダメなもの、これらをほとんど追求しないような体質だからである。

更にその後、今度は交代した鳩山代表自身にも、個人献金ならぬ「故人献金」その他の不正献金があったことが判明し、それが原因なのかどうか、それまでは前向きだった党首討論会を急遽キャンセルしたそうである。(いずれの政治家も、我々の常識とは全く違った世界に生きている連中ということなのであろう)

「100年に一度の世界的金融危機」という錦の御旗を掲げて、補正予算では後世にその莫大な借金を積み増しするような「大盤振る舞い」がまたぞろ行われた。小泉構造改革で決まった「骨太の方針」などは全く無視し、「選挙対策」という口実での族議員ども守旧派による巻き返しとともに、最近の情勢で天下り先の確保が危うくなった官僚どもの悪知恵もあり、「アニメの殿堂」のような箱物を100億円以上もかけて作ろうという計画は、正に「火事場泥棒」の発想そのものである。

つい先日のニュースでは、国土交通省の天下り企業で、3年連続で官製談合が見つかったそうであるが(それにしても懲りない連中である)、先の郵便事業での不正に絡んだ厚労省の女性局長の逮捕といい、この国の統治システムは、政官共に完全に崩壊していると言っても過言ではない。そして今日、このような閉塞感を生んでいる責任を、麻生総理以下の政治家は、一体全体どのように感じているのであろうか？

自民党自身による内部改革など、「百年待っても無駄」なことが証明された。この際、これもダメなことが判りきっている民主党に、一度政権交代させるしか方法がないと思われるところにこの国の悲劇があり、我々国民は一刻も早く目覚めなければ、それこそ何をやっても「Too Late」となってしまうことであろう。

閑話休題。

先般、米国で開かれた国際ピアノコンクールで、全盲で弱冠二十歳の辻井信行さんが見事に優勝した。テレビでその演奏ぶりを見て、同じ日本人として涙が出るほど感動した。そして報道で彼の育った環境を知り、いかに家族の温かい励ましやアドバイスが、人間の成長にとって重要かということに改めて実感した。

聞くところによると、彼の祖父と父親は産婦人科の医師だそうである。彼が生まれて、先天性の視力障害を持っていることが判った時の、家族や周囲の落胆振りは想像に難くない。だが彼の祖父は職業柄、ある確率で先天性な障害を持つ人間が必ずいる現実を知っており、たまたま自分の家庭にそれが起こったものと考えて、孫のため最善の努力と協力をしてあげようと誓ったそうであるが、何という前向きな考え方かと大変感心させられた。

生まれつき視力がないというハンディを背負いながら、あれだけの演奏をこなし、更に彼の話す内容を聞いていると、環境さえ整えてあげれば、人間誰も想像以上の潜在能力が発揮できる可能性があるのではないかと思えてならない。逆に言えば、彼が健常者として生まれてきていたら、その時はたしてここまで成長できていたのであろうか？

記者会見で辻井さんは「もし1日だけ目が見えるとしたら、一番見たいのは両親の顔。けど今は心の目で見ているので、満足している。」と答えていた。幸せの第一歩は家族の絆であることに改めて気付かせてくれた辻井さん。今後益々の活躍を心から祈りたい。

以上